

九州沖縄土を考える会冬期研修会を開催しました。

2025年4月1日



牧野会長

九州沖縄土を考える会は、2月27日(木)に、【**土質をつかむⅢ 熊本編**】をテーマに研修会を開催しました。現地研修では、農研機構 農業環境研究部門(農環研)とスガノ農機の共同研究として全国各地で行われている土壌断面調査とモノリス採取を熊本県菊陽町の火の国ファームさんのほ場で行いました。年2作、10年以上にんじんを連作するほ場では、24インチのプラウで約60cm起こされている境界と、それを上層部と下層部で二分割されている

状態が断面から見てとれました。事実を赤裸々に映し出す土壌断面を前に「ここだけの話」が次々に飛び出すのが、この勉強会。気になる方は次回のご参加お待ちしております！

アークホテル熊本城前に移動しての座学では、前島先生から前回調査を行った仲井農園さんの断面調査報告に続き、「土壌の力を引き出すために～土壌の陽イオン交換容量(CEC)について～」のタイトルで帯広畜産大学 谷 昌幸教授にご講演をいただきました。今回で3回目となる講演は、概論から理解を深めるためのキーワード解説となり、土壌断面調査票の解析では、これまでのアドバイスが活かした結果が散見できました。九州沖縄は、次回も土壌断面調査を軸にした勉強会を9月に長崎で開催いたします。詳細が決まりましたら改めてご案内いたします。



谷教授の鋭いご質問に笑顔でこたえる、ほ場をご提供いただいた火の国ファームの本田晃久社長(左)と先代の浩久さん(右)。



火の国ファームの冷蔵庫で出荷を待つにんじん。梱包される箱には土を考える会の会員であることが明示されていました。

前島先生の説明に身を乗り出して聞き入る参加者の皆さん

前島先生の断面しとくちコメント

熊本県菊池郡菊陽町原水 火の国ファーム(前作:ニンジン)

阿蘇の火砕流台地上に年代の異なる火山灰が堆積してきた黒ボク土です。有機物に富む黒褐色の作土層は比較的新しい火山灰で、第1層(0-18cm)、第2層(18-35cm)、第3層(35-58cm)に分かれ、第1層は収穫時の重機の圧密を受けてやや硬く締まっています。このほ場では10年以上にわたり年2回ニンジンが栽培されており、作土層は半年ごとにプラウを用いて天地返しされています。すなわち第1層と第2層は、第3層と半年ごとに反転され、さらに緑肥のすき込みや資材の投入により、連作障害を回避しています。また60cm以深の黒色土層は、昭和45～47年ごろの基盤整備の影響を受けていない元々の土壌で有機物にすこぶる富む古い火山灰の土層になっています。全層を通じて透水性・排水性は良好ですが、水食や風食を受けやすいため、裸地期間中の表土の保全に留意する必要があります。



前回ほ場提供者の仲井さんへモノリス贈呈

